

「漢文」の教材編成をめぐって

国語科 奥村郁子

1. はじめに

高校国語における「漢文」というジャンルは、「古文」とともに生徒とくに一年生にとって馴染みが薄く、場合によっては英語以上に抵抗感を持つものであるようだ。理由としては、中学校でわずかに習ったとはいうものの、本格的に学習するのは初めてのいわば〈新しい科目〉であり、その導入段階において、訓読や書き下しの規則を、数多く習得しなければならないのがめんどろだということもあろう。また、作詩・作文の能力が、科挙という試験制度によって、官吏としての出世、栄達と直接結びついていた古代の中国や、学問といえば漢学を、文(ふみ)といえば漢籍を意味した平安朝の日本などとは異なり、現代高校生の「漢文」の学習が、実生活の中で直接役に立つというわけでもない(わずかに大学入試を除いては)。江戸期の文人は言うにおよばず、明治の頃までは、いわゆる知識階級と言われるような人々は、幼時から素読の手ほどきを受け、相当高度な漢籍を読みこなしていたといわれ、明治初期に渡欧した当時のエリートたちが書き残した漢詩を集めた『幕末明治 海外体験詩集——海舟・敬亭より鷗外・漱石にいたる』(昭和59年大東文化大学東洋研究所刊)などをみると、その知識・教養の豊かさは目をみはるばかりである。しかし、そうした教養主義的、あるいは趣味的な意味合いもまた薄れてしまっているのが、現代における「漢文」の現状であろう。

だが、中国古典の文学としての価値の高さや、日本の古典文学や歴史に及ぼした影響の大きさ、現代日本語のなかにまで脈々と生き続けている漢文訓読的文体の果たしてきた役割を考えると、国語を教える立場にあるものとして、こうした「漢文」離れの状態をなんとかできないものかと思う。そこで本稿においては、現在の高校現場における「漢文」という科目の問題点を洗い出すとともに、「漢文」教材のなかからとくに漢詩をとりあげて、その取り扱い方を中心に、ささやかな試みの一端を述べてみたい。

2. 「漢文」教材の特色と問題点——他のジャンルと比較して

「漢文」といえば自明の事のように、国語科が担当しているが、もとを正せばこれは言うまでもなく中国の古典文学、すなわち外国文学であり、外国語である。ただし、日本人は漢文との関わりはかなり早い段階から、それに訓点を付して書き下し、日本語として読んでしまうという画期的な離れ業をやったのけた。今日、「漢文」が国語科のなかに位置づけられているのは、そのお蔭を被った結果なのである。したがって、これを学習するにあたっては、入門期において文法(訓読法などを含む)や音読が重視されるなど、語学学習的要素がどうしても強くならざるをえない。この時期の教材としては、格言・故事成語などといった内容的には平易なものがほとんどであるが、生徒の学力の程度から考えても、文学や思想などといった高度な内容を読める段階ではもちろんないからである。そして、この段階から出発してある程度の文章なり作品なりが読めるようになるには、それ相当の時間と指導を必要とすることもまた言うまでもないだろう。

ところがここに、現在の高校現場における「漢文」が抱える大きな三つの問題が存在する。第一は時間的な問題、すなわち「漢文」に配当される単位数が非常に少ないという点である。新指導要領では、〈国語I〉〈国語II〉ともに標準単位数は四単位だが、このなかで「現代文」「古文」

「漢文」を学習するとなると、「漢文」に充てることのできるのは、せいぜい一単位（あればいい方）である。かりに国語科に増加単位として一単位が認められて五単位になったとしても、おそらく「漢文」にまわされて二単位となることはないであろう。教育課程における全体の修得単位数が減少している流れのなかで、今後「漢文」の配当単位数がふえることはまず望めないが、週に一回（あるかないか）の授業だけでは、量的にも質的にも十分とは言い得ないことだけは確かである。前に、素読から入り自ら多くの漢詩文をものした明治の知識人に触れたが、それとは比ぶべくもない現代高校生の状況である。

次に問題点の第二とは、教授者側の問題であり、それは授業の内容・質に関わるものである。はっきりとした調査に基づいて言うわけではないが、国語科の教員のなかで、漢文学（中国文学）を専攻したり、外国語として中国語を学習したというものは、おそらく非常に少ないのではないかとすればそれは、教員の側も「漢文」を学んだのは自分の高校時代だけ、というケースが多いということの意味している。もちろん、その後の読書や教材研究などを通して、「漢文」に関する知識の拡充と授業の質の向上は図られているであろうし、「漢文」を教える教員が、とくに漢文学（中国文学）の専門家や研究者である必要もないと思う。しかし、自分自身がかつて高校で受けた漢文の授業もまた、（おそらく）時間的に不十分であったらうということを考えれば、教材研究を十分に行ない、知識の拡充・確認を怠らないことが大切であろう。

最後に第三の問題点として、教材のことに触れておきたい。おなじく古典の分野であっても「古文」については、活字化されている作品も多く、またそれについての注釈や解説も充実しているため、教科書以外の作品を教材としてを授業に使ったり、古文に興味をもった生徒に対して読書指導を行ったりすることが、比較的容易にできるのだが、漢文の場合はそうはいかない。たしかに『史記』『論語』『唐詩選』など一定の作品については翻刻・注釈や関連書物も多いが、その他の作品についてみると必ずしも十分ではなく、たとえ活字化されていたとしても、高価であったり手に入りにくかったりすることがしばしばなのである。そこでおのずから、「漢文」の教材は教科書のみ頼らざるをえないことになる。前に述べたように、授業実施時間数そのものが非常に少ないのであるから、授業だけなら教科書だけで十分なのだ（それすら消化できない恐れもあるほどだ）が、教科書教材をきっかけとして授業を広げたり、読書指導をしたりしようとするときには、読みやすくできるだけ安価な、専門書ではない（高校生を含む）一般読者向けの本が欲しいと思う。しかしこれは、漢文学の分野における研究者の数や注釈書の種類および発行部数が、おそらく国文学とは比較にならないほど少ないであろう、ということを見ると、やむをえない状況かもしれない。

以上、なかなかよい解決策が見えてこないような問題点を列挙したが、生徒の様子をみると、わずかながら希望が感じられるような現象を認めることもできる。それは、毎年、学年に1、2名から数名程度であるが、非常に漢文が好きで、翻訳されたものや翻案小説の類を中心として、漢文関係の書物を相当数読破している生徒が、必ず存在すること、そして、（教師の押しつけでなく）生徒間の口コミによって紹介され読まれている作品がいくつか存在すること、である。前者の生徒の場合、漢文が好きになったきっかけは吉川英治や陳舜臣などといった大衆作家の翻案小説や、場合によっては漫画であることが多い。また後者については、そのひきがねとなったのはテレビゲームであった。しかし、導入の役割を果たすものが何であろうとかまわない、と私は思っている。とりあえず、中国の古典文学の世界に足を踏み入れ、そこに浸ってみるのが大切なのである。そうすれば、学校の「漢文」にも、もっと身近に親しみをもってみることもできるだろう。本来はそうした導入（動機づけ）の役割をこそ、授業が果たすべきであることは重々承知しているが、時間的制約により如何ともしがたいことは前述のとおり

りである。せめて教材の工夫により少しでも現状を改善できないかというのが、私のささやかな願いであり、また本稿のねらいでもある。

3.〈漢詩〉教材の特色と問題点

「漢文」教材と一口にいても、その内容はさらにいくつかに分類されるが、大きく分けて、

- ①史 伝 …… 『史記』『十八史略』など
- ②詩・文章 …… 『唐詩選』『三体詩』『古文真宝』など
- ③思 想 …… 『論語』『孟子』『老子』『韓非子』など

とすることができよう。これらの作品名をみれば、国語科教員ならずとも、かつて自分が学習した漢文の一節を少なからず思い出すことができるのではないだろうか。それぐらい「漢文」教材というものは確立（今風に言えば“定番化”）しているといっても過言ではない。

こうした教材群の中で、今回、本稿で取り上げるのは ②詩・文章 のうちの、〈詩〉に関してである。〈詩〉に興味を持たせ、イメージをふくらませ、一首でも多くの〈詩〉を読ませたい。教科書に採録された作品を使いながらも、その扱い方に工夫を加えて、単位時数の少なさを少しでもカバーできるような教材を考えてみたい、と思う。

そもそも詩というものは、洋の東西、時代の今古を問わず、詩人の感情や人間性が直接的に生々しく表現され、読者もそれを理性の部分ではなく、どちらかという感性の部分で受けとめ感動を覚える、という文学の一ジャンルといえるだろう。漢詩においてもそれは変わるまい。そのことは、歴史的事実の叙述に重きを置く史伝や、比喩や寓意を多用して教訓的な結論を導く思想、論理的な展開を重視する文章など他のジャンルの作品と比較してみると明らかである。すなわち詩とは、かの有名な『古今和歌集仮名序』の一節を引用するまでもなく、詩人の心に秘めた感情が言葉となってほとばしりてたものなのである。

詩がそういうものであるとするならば、漢詩を読むときにも、その詩が語るころの詩人の感情（思い）に、読者として素直に耳を傾ければよいかというと、そう単純なわけにはいかない。なぜなら先に述べた、詩は詩人の感情のほとばしりである、という普遍的な側面とは別に、漢詩には漢詩に特有の（そしてそれは、他のどの時代どの国の詩についてもいえることだが）風土や歴史、時代背景を知ることが、どうしても必要であるからだ。

しかし、紙数の限られた教科書という場では、そうした解説的な部分を多く取れないという制約をどうすることもできない。また、教科書の中での他の教材とのバランスという問題もあって、教育課程の新旧を問わず、教科書における〈詩〉教材というのは、採録数が少なく、解説も絶句、律詩など詩の形式や規則について、一通りのことを述べるにとどまるものがほとんどである。もし、十分な授業時数が確保されているならば、教師が、質量ともにそれを補足すればよいのであるが、なかなか難しいことは前述のとおりである。そこで、補助教材の出番となるわけだが、これまで述べてきたような〈詩〉教材の問題点を出来るだけ補うようなものを考えてみたいと思う。

ただ、〈詩〉といってもその範囲は広く、すべての時代を網羅して論じることは、かえって主題を拡散させることになりかねないので、ここでは唐詩に話を限定して考えることとしたい。その理由については後に述べる。

4. 現行の教科書はどうなっているか。

唐詩の補助教材の具体的な検討に入る前に、現在、第1学年ですでに使用され、来年度以降の第2学年以上で使用されることになる、新指導要領に基づく〈国語I〉〈国語II〉〈古典I〉の教科書において、唐詩の採録状況がどのようなかを見とくことにしよう。(後掲の表「新教育課程用教科書における唐詩教材の採録状況」参照)

この表から読み取ることができるいくつかの点について、以下に整理してコメントを付す。

- (1) 〈国語I〉では調査したすべての教科書において唐詩が採録されており、第一学年の漢文教材として定着している。

漢文の入門期の教材として唐詩が定着しているということである。経験的に予想されたことでもあるが、これにはいくつかの理由をあげることができると思う。ひとつには、唐詩のなかには、いつどこで知ったかはともかくとして、人口に膾炙し広く親しまれている有名な作品がいくつかあるということである。杜甫の「春望」や孟浩然の「春暁」を中学校の授業で習ったという生徒も多い。また、詩(とくに近体詩)は、作品としての長さが短く、文法的にも複雑なものはほとんどないため、読むだけならば文法をマスターしていない一年生にでも抵抗なく読めるという利点もあるだろう。さらに作品の短さは、1時間の授業のなかで解説・鑑賞することを可能とするため、授業の完結性をはかるといふ点においても、格言・故事成語につづく入門教材として適しているといえる。

- (2) 〈国語I〉の教材には、いくつもの教科書に重複して採録される、教材として定着した作品が多くある。

調査した17種類の教科書に採録された唐詩の数は39首と多いが、そのうち11首は6種以上の教科書に重複して採録されており、重複採録数をもっとも多い王維の「送元二使安西」などは12種の教科書に載せられている。そしてそれらの作品は旧教育課程用教科書においてもやはり多く採られていたものがほとんどであり、〈国語I〉の教材として定まった評価を得てきた作品であると考えてよいだろう。しかし一方では、旧課程の国語I・IIでは採られたことがない作品もあり(表中の†印を付したもの)、新教材発掘の姿勢がうかがえる。したがって〈国語I〉では、これまで教材として定着してきた作品を中心に据えながら、教材として新しいものを若干取り入れている、といえるだろう。

- (3) 〈国語II〉の唐詩は〈国語I〉と比較して教科書間の違いが大きい。

〈国語II〉では唐詩を採らないものが24種中5種あり、〈国語I〉と比べると採録の割合が低い。また、ひとつの作品が複数の教科書に重複して採録されているケースも〈国語I〉に比べて少なく、李白の「子夜呉歌」が9種の教科書に採られているほかは、すべて4種以下である。すなわち〈国語I〉より作品がバラエティに富んでいると言ってよいだろう。旧課程の国語I・IIになかった作品(表中の†印)の数も〈国語I〉より多く、これまでとは違ったものを教材に盛り込み、旧課程の教科書とも他社の新課程の教科書とも違う個性をだそうとしているかのようである。

(4) <古典 I>の唐詩教材は、非常に変化に富んでいる。

<国語 II>において見られた教科書間の違いがさらにはっきりと表れているのが<古典 I>である。<古典 I>は<国語 I><国語 II>に比べて紙数にゆとりがあることもあり、また著名な作品はすでに学習済みとみなし得る第 2 学年以上用の教科書であるということもあて、じつに多くの作品が採録されており、その大半が他の教科書と重複しないか、しても 2 種類以下という状況である。

以上、現行の新教育課程用教科書に採録されている唐詩の教材についてみてきたが、ここで、それらの作品を、各教科書がどのように構成・配置しているかという点についても述べておきたい。唐詩を教材として構成・配置するには大きく分けてふたつの方法がある。第一は、詩型によって分類し並べるというやり方であり、第二は、主題や題材など詩の内容によって分類し並べる方法である。

詩型による分類というのは、普通、①五言絶句 ②七言絶句 ③五言律詩 ④七言律詩 ⑤古詩の順に、作品を 1、2 首ずつ列挙するやり方であり、旧課程の教科書のほとんどが、<国語 I><国語 II>を通じて採ってきた方法である。そして、<国語 I>においては、詩の単元の最後に「漢詩のきまり」などとして、近体詩の詩型と規則（押韻・対句・平仄など）を 1～2 ページで解説するものが多い。この形態は、新課程用教科書においてもほとんどそのまま継承されたようで、あとに掲げる数種の教科書を除き、詩型によって分類・配列がなされている。

この方法の長所としては、近体詩の形式や規則がわかりやすく、また同型の詩が並べてあるために、絶句における起承転結といった詩の展開のパターンを実際の詩に即して学べるということであろう。しかし一方、種々雑多な内容の詩を、1 時間の授業の中で 2 首 3 首と読むために、詩の印象が拡散してしまいがちであること、また、各詩についての解説事項にも相互の関連性がないために、教員の説明が盛り沢山になって、作品自体の印象が薄くなったり、鑑賞のための時間が取れなかったり、あまり多くの作品を読むことが出来なかったりすることがあるという短所が考えられる。

これに対して、主題・題材による分類というのは、文字どおり詩の主題や題材（自然・友情・辺塞など）によって分類する方法である。この方法の長所は、主題別に分類して、似たような内容の詩をまとめて読むことにより、それらの詩に共通する雰囲気や味わえるということが第一にあげられよう。たとえば「送別」という項目を立てて、離別・送別を主題とする詩を数首まとめて読むと、旅立つ人を見送るものの心情が、時間や空間を超えた普遍的なものとして読者に感じられるだろう。そして同時に、それをいかに表現しているかという作者の個性や、唐代に独特の文化や時代背景などといった唐詩の特徴もまた、鮮明に見えてくるに違いない。授業では、歴史・風土・風俗など、その主題に関連の深いものを集約的に扱うことで、解説が散漫にならないようにできると思われる。ただし、こうした長所はある程度まとまった数の詩を並べて読んでみることによってはっきりするのであって、1 首や 2 首では、詩型による分類と実質的にはあまり変わらないと思われる。したがってこの方法は、教科書ではなかなか採用しにくい形式だといえるだろう。

私自身としては、これまで教科書で唐詩の単元の教材を使って授業を実施すると、授業が拡散してしまう感じがかりにくかったので、分類の型としては、後者のほうがよいと思う。そして新教育課程用教科書のなかに、この分類方式を採用するのが表れはじめたということについては、おおいに歓迎したいと思うのである。

参考までに、主題別分類方式を採る新課程用の教科書を紹介しておく。

発行者(略称)教科書	教科書名	分類項目・採録詩題 *印は、唐代以外の詩
東書 503	新編 国語 I	【自然】 春暁 竹里館 登鶴鵲楼 【友情】 送元二使安西 黄鶴楼送孟浩然之広陵 【人生】 静夜思 涼州詞 春望
大修館 510	高等学校 新国語 I	【自然】 春暁 登鶴鵲楼 江雪 江南春 【人生】 静夜思 送元二使安西 涼州詞 春望
大修館 511	現代の国語 I	【自然】 春暁 登鶴鵲楼 【送別】 送元二使安西 黄鶴楼送孟浩然之広陵 【憂愁】 涼州詞 春望 【旅情】 静夜詞 登高
旺文社 521	高等学校 国語 I	【春夏の詩】 勸酒 送元二使安西 江南春 春夜喜雨 *遊山西村 *六月二十七日望湖楼醉書 【秋冬の詩】 舟中読元九 聞樂天左降江州司馬 秋風引 秋日 太原早秋 江雪
大修館 502	高等学校 国語 II	【家族】 *陟岵 *責子 九月九日憶山東兄弟 【夫婦】 *古詩 月夜 子夜呉歌 【友情】 八月十五日夜禁中独直对月憶元九 聞樂天左降江州司馬
第一 553	高等学校 古典	【春の詩】 辛夷塢 絶句 勸酒 【秋の詩】 秋風引 秋夜寄丘二十二員外 山行 【旅の詩】 峨眉山月歌 磧中作 楓橋夜泊
大修館 502	高等学校 古典 [漢文]	【春の詩】 辛夷塢 絶句 春夜洛城聞笛 【秋の詩】 秋日 秋夜寄丘二十二員外 山行 【旅の詩】 早發白帝城 磧中作 楓橋夜泊 【真情】 送友人 月夜 八月十五日夜禁中独直对月憶元九 【望郷】 黄鶴楼 秋興
旺文社 511	高等学校 古典 I	詩歌 — 人生の諸相 【青春】 春日偶作 登科後 相思 無題 新婚別 【壯年】 曲江 *夜直 從軍行 己亥歲 *責子 【老年】 秋浦歌 秘省後序 *十五從軍征 *示兒

5. 主題別分類による唐詩の教材編成の試み

以上のような観点から「漢文」教科書の〈詩〉教材を、主題別に分類するとどうなるであろうか。いま唐詩に限って、分類を試みてみたい。唐詩に限る理由の第一は、いうまでもなく唐詩が絶句・律詩に代表される近体詩の形式が完成した時代であるということである。いくつかの古詩を除けば、われわれの耳に馴染んだ〈漢詩〉というものはほとんど、唐代の絶句か律詩である。杜甫の「春望」(五言律詩)、孟浩然の「春暁」(五言絶句)などを、中学校で習ったという経験を持つ生徒が多いことは前に述べたとおり。たしかに『詩経』『文選』などの古詩や、蘇軾、陸游など宋代の詩人の作品、日本漢詩など、唐詩以外のすぐれた作品が対象外となる恨みはあるが、ひとつの主題のもとに、時代背景や文化風俗を同じくする詩を集めて読むためには、ある程度、時代を限定する必要がある。しかも、ひと口に唐代といっても約三百年の長きにわたり(618~907)、そこには李杜王孟などの大詩人が、キラ星のごとく名を連ねているのだ。唐代の詩に限定したからといって、決して作品の層が薄くなる、底が浅くなるということはないと思われる。

実際には、どういう方針のもとにどんな主題項目を立てて分類するかということが、第一の問題である。前ページに挙げた、新課程用教科書の例は非常に参考にはなるが、教科書であるために、やはり項目数も採録詩数も少ない。そもそも詩歌を主題や題材によって分類するという発想は新しいものではなく、中国文学の世界では〈類書〉といって、詩賦を分類収集した作詩の参考書が、古くから作られてきたし、『万葉集』以来の日本の〈和歌集〉にも明らかな分類意図が存在する。おおざっぱにいうと〈類書〉の部類意識は「天・地・人」を基本とし、〈和歌集〉のそれは「四季・恋・雑」を基本としているが、わが国平安朝の文人貴族、藤原公任が和漢の詩句と和歌を集めて編んだ『和漢朗詠集』二巻などは、上巻に四季、下巻に雑という〈和歌集〉的分類を基本におきながら細部、とくに下巻ではほぼ「天・地・人」的な項目を立てており、部類意識そのものの中に和と漢の中間的な要素が認められる。そこで今、唐詩の教材をどう分類するかについてであるが、対象が唐詩であるのだから類書分類が基本となるものの、実際には類書の項目は膨大な数であり、当然のことながら選択が必要である。また和歌と違って詩の場合、自然や四季を題材にした作品であっても、そこに詩人の思いが強く込められていたり暗示されていたりすることが多いので(とくに教科書教材の場合はそのケースが多い)、自然よりは人事を中心とした分類項目を、類書や『和漢朗詠集』下巻を参考にしながら選んで、教材の分類を試み(次頁の表「主題別教材分類項目(試案)」参照)さらに、各項目における解説事項について若干考察してみたいと思う。

主題別教材分類項目（試案）

分 類 項 目		解 説 事 項 な ど
人 生 の 詩	I 及第 II 左遷・貶謫 III 閑居・隱棲 IV 嘆老	(次ページ以降参照)
情 愛 の 詩	I 友情 II 送別・行旅 III 家族愛	<ul style="list-style-type: none"> ・李白と杜甫の交友・白居易と元稹の交友 ・中国文学に見える交友と成語（○○の交わり） ・送別の習慣（楊柳を折る・餞別の宴など） ・夫婦の愛情（思婦の詩） ・親子の愛情 ・兄弟に対する愛情
戦乱・辺塞の詩	I 戦乱 II 辺塞・従軍	<ul style="list-style-type: none"> ・安祿山の乱について。 反乱の経緯と盛唐の詩人たち 杜甫の戦乱詩 「春望」「月夜」「登楼」 「月夜憶兄弟」「新婚別」 「石壕吏」「兵車行」 など 白 居 易 「長恨歌」 ・辺塞詩とその背景－唐代の辺境地域 ・西域の文物（シルクロードの時代） ・辺塞詩人、岑参の詩
そ の 他	I 自然 II 歴史・懐古	<ul style="list-style-type: none"> ・春夏秋冬の詩と各季節の題材 ・眺望・風景の詩 ・題材とされた歴史故事について ・懐古の詩のパターンについて 自然の営みは昔と変わらないが、人間の栄華 や築いたものはやがて滅びる運命にあること を、両者を対比させながら詠む。

まだ整理されておらず検討を要する点も多いが、現時点での試案を示してみた。

次に「人生の詩」について、とりあげる詩や解説事項、参考文献などについて、やや詳しく記したものをあげる。これもさらに検討して、生徒用教材にまで煮詰めていきたいと考えている。

人生の詩

I 及第

隋代に始まった官吏登用試験である「科挙」は、唐代においてますます盛んに行なわれるようになった。制度の変遷や複雑な実施機構はひとまず置くとして、その試験科目のうちでも、詩賦を作る能力が重視される進士科がもつとも重んじられたことは有名である。唐代の詩人の人生は、この科挙に合格したところから、第一歩を踏み出すのである。Ⅷ及第Ⅴの喜びを歌いあげた詩は、教科書教材のなかでは、後掲の一首のみであるが、「人生の詩」の第一として、この項目を立てたいと思う。

また、そもそも作詩の能力が重んじられた根底には、詩が政治に対して強い影響力をもつと考える『詩経』以来の中国に独特な文学観が存在するのであり、生徒に対してはそのあたりを補足説明する必要があるだろう。そうすることによって、この詩を詠んだ詩人の真情が理解されると同時に、ほとんどの詩人＝官僚であった当時の様子や、そうになっている理由が見えてくるに違いない。

登科後
 昔日齷齪不足誇
 今朝放蕩思無涯
 春風得意馬蹄疾
 一日看尽長安花

孟郊

※科挙に合格した喜び。
 登科＝科挙に及第する。
 齷齪＝あくせくと勉学に励む。
 放蕩＝気持ちのびやかに広がるさま。

○解説事項

- ・中国における文学と政治。読書人の生き方。
- ・科挙について（参考文献 講談社現代親書『科挙の話』）

II 左遷・貶謫

せつかく苦勞を重ねて官吏として採用されたにもかかわらず、その後、政変に巻き込まれるなどしてⅧ左遷・貶謫Ⅴの憂き目にあつた詩人は数多い。志半ばにして、追われるように都を出ていかねばならなかつた彼らの無念の思いや望郷の念は、都とは掛け離れた任地・配所の風景の中で、いつそうかき立てられたことであろう。

左遷至藍関示姪孫湘
 一封朝奏九重天
 夕貶潮州路八千
 欲為聖明除弊事
 肯將衰朽惜殘年
 雲橫秦嶺家何在
 雪擁藍関馬不前
 知汝遠來應有意
 好收吾骨瘴江邊

韓愈

※諫言したために左遷された無念の思い。
 左遷＝皇帝に諫言したため、潮州刺史に貶された。
 藍関＝藍田関。関中から南へ向かう交通の要所。
 姪孫湘＝兄弟の孫の、韓湘。
 秦嶺＝長安の南に連なる山脈
 瘴江＝毒氣（瘴氣）の漂う、南方の川。

秋風引 劉禹錫

何處秋風至 蕭蕭送雁群
朝來入庭樹 孤客最先聞

※秋風に触発された望郷の念。
送雁群―秋風が北から南へ雁の群れを吹き送る。
孤客―孤独な旅人。朗州（湖南省）に左遷されていた。

聞樂天左降江州司馬 元稹

殘燈無焰影憧憧
此夕聞君謫九江
垂死病中驚坐起
暗風吹雨入寒窓

※親友の左遷を悲しむ真情。
樂天―元稹の親友、白樂天。
江州司馬―江州（江西省）の長官補佐役。
憧憧―揺れ動くさま。
垂死―瀕死。

江雪 柳宗元

千山鳥飛絕 万徑人蹤滅
孤舟蓑笠翁 独釣寒江雪

※永州（湖南省）に左遷されていたときの孤高の心境。

早發白帝城 李白

朝辭白帝彩雲間
千里江陵一日還
兩岸猿聲啼不住
輕舟已過万重山

※赦免されて、配所夜郎（貴州省）から帰還できる喜び。
白帝城―長江の三溪に臨む古城。
江陵―現在の湖北省江陵県。

- 解説事項
- ・左遷・貶謫の原因となった事件と詩人の立場。
 - ・任地、配流先の確認（都との位置関係）。

III 閑居・隱棲

俗世間のことにわずらわされる事無く、のんびりと悠々自適の暮らしをする境地を詠んだ詩を集める。彼らは、官職に就いたままのこともあり、また、まったく引退した状態で隠者と呼ばれることもある。しかしそこには、政治への志は持ちながら、世に用いられない者の悲哀がそこはかどなく漂っている。唐代版の窓際族といったところか。

春 曉

孟 浩 然

春 眠 不 覺 曉 處 處 聞 啼 鳥
夜 來 風 雨 聲 花 落 知 多 少

※春の朝寝を楽しむ心境。

夜来—ゆうべ。

多少—「どれほど」という疑問を表す。

香 炉 峰 下、新 卜 山 居 草 堂 初 成、
偶 題 東 壁

白 居 易

日 高 睡 足 猶 慵 起
小 閣 重 衾 不 怕 寒
遺 愛 寺 鐘 欵 枕 聽
香 炉 峰 雪 撥 簾 看
匡 廬 便 是 逃 名 地
司 馬 仍 為 送 老 官
心 泰 身 寧 是 歸 處
故 鄉 何 獨 在 長 安

※江州に左遷されて三年目の作。

香炉峰—廬山の北峰。

遺愛寺—香炉峰の北方にあった寺

匡廬—廬山のこと。

司馬—州の長官を補佐する役目。

実務のない閑職。

(参考)

中国の春の詩をざっと概観すると、「春の曉」を詠ずる作品は圧倒的に中春から晩春にかけてのあけがたを題材にするものが多い。しかもそれらの作品には鳥の声か落花のイメージが—あるいは孟浩然の作品のように二種のイメージとも—かならずといってよいほど付加されている。(中略)鳥の声の聴覚イメージから生まれるのは、明るく軽妙な快活の感覚であり、落花の視覚イメージが喚起するものもまた明るい華やいた情感である。だが、落花のイメージは同時に過ぎゆく時と美しいものの滅びゆく悲哀をも呼びさます。「春の曉」のもつイメージ群は重層的で、かつ複雑である。さらにまた、そのような春の朝の情感に悠々とひとりこむことができるのは、一般に厳しい宮仕えとは無縁の隠遁生活を送っている人か、閑職にある人である。特に、宮中の朝廷に参列しなければならない中央官庁の役人たちには、朝のんびりとしている暇は全くない、言いかえれば政界の重要なポストから疎外されている人でなければ、春の朝のすばらしいひとときを満喫できない。一年のなかでも最も気分のよい晩春のあけがたを寝台の上で悠々と過ごせるのは、まされもなくかれらに許された特権であるが、一方では満たされない失意の心情が含蓄される。孟浩然の詩などはその典型であるが、一般に「春の曉」をうたう詩に、隠者、あるいは閑職者、疎外者のイメージがつきまとうのは、以上の理由によるのである。

(佐藤 保著『漢詩のイメージ』より)

竹里館 王维
 独坐幽篁裏 弹琴復長嘯
 深林人不知 明月來相照

※作者の別荘にある竹林の中の館で、世俗を離れて楽しむ。

山中与幽人对酌 李白
 兩人対酌山花開
 一杯一杯復一杯
 我醉欲眠卿且去
 明朝有意抱琴來

※隠者と気ままに酒を酌み交わす楽しみ。
 幽人—隠遁者。

○解説事項 ・ 閑居の友としての、琴・詩・酒について。

IV 嘆老

自分にとって不本意な人生を送りながら老いてゆくことほど、人を嘆かせるものはない。ある日ふと鏡に映った自分の姿を見て、白髪と化した頭髪に気づき、身体の衰えを身に沁みて感じるとき、詩人の口をついて老いを嘆く言葉が漏れるのである。

また、老いはまさに生命の衰えであり、人の一生を季節の巡りにたとえるならば「人生の秋」ともいうべき時である。もともと中国文学における秋という季節は、古くから悲しみをかき立てる時として登場し、「悲秋」の詩語もあるほどなので、△嘆老△は秋と結びつけて詠まれることが多い。

秋浦歌 李白
 白髮三千丈 緣愁似個長
 不知明鏡裏 何處得秋霜

※白髪を「秋霜」にたとえる。
 似個—「如此」に同じ。

登高 杜甫
 風急天高猿嘯哀
 渚清沙白鳥飛迴
 無邊落木蕭蕭下
 不盡長江滾滾來
 萬里悲秋常作客
 百年多病獨登台
 艱難苦恨繁霜鬢
 潦倒新停濁酒杯

※「悲秋」の心境。
 登高—陰曆九月九日（重陽節句）
 に、近郊の丘に登って菊酒を飲み一年の厄払いをする年中行事
 詩題としてよく詠まれる。
 猿嘯—悲しみをかきたてる猿の啼き声。

旅 夜 書 懷

杜 甫

※ 「老病」の身の憂愁。

細草微風岸 危檣独夜舟
星垂平野闊 月湧大江流
名豈文章著 官忝老病休
飄飄何所似 天地一沙鷗

(参考)

秋は悲しい。春風に舞い飛ぶ落花に対しても、人びとが悲しみの情をいただくことは先に見たとおりであるが、落花を愛惜するそれの中にはどこかしら甘美で濃艶な思いがただよふのとは対照的に、秋の悲しみは肅然とした痛々しさを帯びる。いわゆる「悲秋」のときであり、さわさわと吹き来る風、風に散り落ちる木の葉、草花のうえに結ぶ白玉の露、さえわたる月影、月光にも見まごう霜のはな、それらがこの悲しみの季節を具象化するイメージの代表的なものである。

(佐藤 保著『漢詩のイメージ』より)

この詩(「登高」)は、巫峡に近い峡谷の町、州で作られた晩年の作品の一つである。三峽あたりには、野猿が多く、悲しげな声で鳴く。「猿嘯」の「嘯」とは長く尾を引く鳴き声をいう。(中略)揚子江兩岸のそそり立つ峰や重なる崖の険しく高い所で、野で反響し猿があたりの静寂を破って鋭い声で鳴きさげぶ。鳴き声は峡谷の中で、いつまでも余韻を引きながら悲しげに聞こえた。特に群れから離れた孤猿が、夜、鳴きさげぶ声は、三峽の舟旅に苦しむ遊子(たびびと)の心を悲しませたのであった。

(植木久行者『唐詩歳時記』より)

○解説事項

- ・〈嘆老〉と「悲秋」のとりあわせについて。
- ・「登高」「菊酒」などの年中行事について。
- ・「猿嘯」のイメージについて。
- ・誇張や比喩などの表現技巧について。

6. おわりに

これまでに何度も繰り返してきたように、限られた授業の時間を使って教員が生徒に教えてやれる唐詩の知識はごく限られている。したがって、授業がある程度効率よく実施でき、しかも唐詩の世界の印象を散漫なものに終わらせないための補助教材ができないものかというのが、本試みのそもそもの出発点であった。しかし実際に分類しようとする、複数の主題に内容がまたがって決めがたいものもあり、また、分類項目自体の妥当性にもまだ検討の余地があるように思う。よって今回は、教材としてまだ未完成の状態のまま、現時点において考えていることを報告するにとどまるものになってしまったが、今後さらに考えていきたいと思っている。

参考文献

- 佐藤 保著『漢詩のイメージ』（大修館書店 1992年10月刊）
植木久行著『唐詩歳時記－四季と風俗－』（明治書院 昭和55年9月刊）
石川忠久著『漢詩の世界－そのころと味わい－』（新装版）（大修館書店1989年刊）
石川忠久著『漢詩の風景－ことばとところ－』（新装版）（大修館書店1989年刊）
研究資料漢文学 [5]詩I [6]詩II [7]詩III（大修館書店 平成4～5年刊）
『中国文学歳時記』全7巻（同朋舎出版 1989年7月刊）
「月刊しにか」特集・漢詩とは何か（大修館書店 1994年9月号）

新教育課程用教科書における唐詩教材の採録状況

<国語 I> 注1

作 品 名	作者名	採録数	発行者（略称）・教科書番号	旧課程採録数
送元二使安西	王 維	12	東書502・503 三省堂506 教出508 大修館510・511 明治512 右文515・ 516 旺文社521 尚学522・523	16 注2
春望	杜 甫	11	東書502・503 大修館509・510・511 明治512 右文516 筑摩517 角川519 尚学522・523	8
江雪	柳宗元	11	東書502 学図504 三省堂506 教出 508 大修館509・510 右文515・516 角川519 旺文社521 尚学522	14
江南春	杜 牧	10	東書502 学図504 大修館509・510 明治512 右文515・516 旺文社521 尚学522 第一528	8
絶句	杜 甫	8	東書502 大修館509 右文515・516 筑摩517 尚学522・523 第一528	5
登鶴鵲楼	王之涣	8	東書502・503 三省堂506 教出508 大修館510・511 筑摩517 尚学522	7
春曉	孟浩然	8	東書503 教出508 大修館510・511 明治512 右文516 筑摩517 角川519	9
黄鶴楼送孟浩然之広陵	李 白	7	東書503 三省堂506 大修館509・511 右文516 尚学522・523	10
涼州詞	王 翰	7	東書502・503 学図504 三省堂506 大修館509・510・511	11
香炉峰下、新卜山居草堂 初成、偶題東壁	白居易	6	東書502 学図504 三省堂506 教出 508 大修館509 右文516	7

作 品 名	作者名	採録数	発行者（略称）・教科書番号	旧課程採録数
静夜思	李 白	6	東書503 大修館510・511 明治512 右文515 第一528	6
竹里館	王 維	4	東書503 学図504 大修館509 角川519	3
登岳陽楼	杜 甫	3	学図504 三省堂506 第一528	10
早発白帝城	李 白	3	東書502 学図504 教出508	5
鹿柴	王 維	3	右文515 尚学523 第一528	6
秋日	耿 漳	3	旺文社521 尚学522・523	5
磧中作	岑 参	3	角川519 尚学522・523	3
送友人	李 白	2	東書502 筑摩517	4
子夜呉歌	李 白	2	右文516 尚学523	3
山行	杜 牧	2	教図508 尚学523	6
八月十五日夜禁中独直对 月憶元九	白居易	2	角川519 第一528	2
秋風引	劉禹錫	2	明治512 旺文社521	4
勸酒	于武陵	2	三省堂506 旺文社521	1
<p>その他（採録数1）</p> <p>旅夜書懷（杜甫） † 春夜喜雨（同） † 怨情（李白） † 山中幽人对酌（同） † 太原早秋（同） 贈別（杜牧） † 泊秦淮（同） † 舟中讀元九詩（白居易） 楓橋夜泊（張繼） † 胡笳歌送顔真卿使赴河隴（岑参） 除夜作（高適） 黄鶴楼（崔顥） 聞白樂天左降江州司馬（元稹） † 樂遊原（李商隱） † 蜀中九日（王勃） † 州西澗（韋応物）</p>				

※注1 12社17種の新課程用教科書について調査。

※注2 『高等学校国語教育情報事典』（1992年 大修館書店）所収「現行国語教科書教材リスト」による。

<国語II> 注3

作 品 名	作者名	採録数	発行者 (略称) ・教科書番号	旧課程採録数
子夜呉歌	李 白	9	東書530 三省堂534 教出536 大修館537・538 明治540 旺文社548 尚学549 第一553	6 注4
登岳陽楼	杜 甫	4	旺文社547 尚学549・550・551	2
石壕吏	杜 甫	4	大修館537・538 明治542 角川546	4
早発白帝城	杜 甫	3	旺文社547 尚学549・550	0
香炉峰下、新卜山居草堂 初成、偶題東壁	白居易	3	旺文社547 尚学549・550	4
壳炭翁	白居易	3	大修館537・539 筑摩544	3
登高	杜 甫	2	教出536 尚学549	3
贈衛八処士	杜 甫	2	大修館539 尚学550	2
送友人	李 白	2	尚学549・550	4
山中間答	李 白	2	旺文社548 尚学550	4
九月九日憶山東兄弟	王 維	2	第一553・555	2
涼州詞	王 翰	2	教出536 尚学550	1
登幽州台歌	陳子昂	2	東書530 三省堂534	1
聞白樂天左降江州司馬	元 稹	2	第一553・555	1

その他 (採録数1)

月夜 (杜甫) 兵車行 (同) †貧交行 (同) †羌村 (同)
 静夜思 (李白) 越中懷古 (同) †独坐敬亭山 (同) †月下独酌 (同)
 竹里館 (王維) 送別 (同) 鹿柴 (同) 題烏江亭 (杜牧) 夜雪 (白居易)
 †買花 (同) 八月十五日夜禁中独直对月憶元九 (同) 登鶴鵲楼 (王之涣)
 楓橋夜泊 (張繼) 秋風引 (劉禹錫) 賞牡丹 (同) 芙蓉楼送辛漸 (王昌齡)
 †胡笳歌、送顏真卿使赴河隴 (岑參) †度桑乾 (賈島) 代悲白頭翁 (劉希夷)

† 楽遊原（李商隱） 夜雨寄北（同） † 易水送別（駱賓王）
秋夜寄丘二十二員外（韋応物）

※注3 13社24種の新課程用教科書について調査。うち、唐詩教材を採録するものは、12社19種。

※注4 注2に同じ。

< 古典 I > 注5

作 品 名	作者名	採録数	発行者（略称）・教科書番号
月夜	杜 甫	6	大修館503・505 筑摩509 角川510 尚学512 第一514
登高	杜 甫	4	東書501 教図502 右文508 角川510
送友人	李 白	4	大修館503・505 右文508 角川510
絶句	杜 甫	3	東書501 教図502 大修館505
秋浦歌	李 白	3	東書501 筑摩509 旺文社511
竹里館	王 維	3	明治507 右文508 第一515
涼州詞	王 翰	3	右文508 角川510 尚学512
楓橋夜泊	張 継	3	教図502 大修館505 第一515
秋風引	劉禹錫	3	教図502 角川510 第一514
黄鶴楼	崔 顥	3	大修館503・505 明治507

その他（採録数2）

登岳陽楼（杜甫） † 秋興（同） 望廬山瀑布（李白） † 山中与幽人对酌（同）
春夜洛城聞笛（同） † 独坐敬亭山（同） 早發白帝城（同） † 辛夷塢（王維）
九月九日憶山東兄弟（同） 八月十五日夜禁中独直对月憶元九（白樂天）
壳炭翁（同） 長恨歌（同） † 望洞庭（孟浩然） 登鶴鵲楼（王之涣）
涼州詞（同） 芙蓉楼送辛漸（王昌齡） 尋胡隱君（賈島） † 遊子吟（孟郊）
夜雨寄北（李商隱） 左遷至藍關示姪孫湘（韓愈） † 秋夜寄丘二十二員外（韋応物）

その他（採録数1）

絶句①（杜甫） †絶句②（同） †絶句③（同）注6 †春夜喜雨（同）
 †江亭（同） 石壕吏（同） †夢李白（同） †曲江（同）
 †登楼（同） †月夜憶舍弟（同） †新婚別（同）
 峨眉山月歌（李白） †清平調（同） 贈汪倫（同） 子夜吳歌（同）
 月下独酌（同） 静夜思（同） 黃鶴樓送孟浩然之廣陵（同） †相思（王維）
 鹿柴（同） 江南春（杜牧） 山行（同） 秋日（耿漳） 從軍行（王昌齡）
 香炉峰下、新卜山居草堂初成、偶題東壁（白居易） †秘省後序（同）
 †別董大（高適） 勸酒（于武陵） †胡笳歌、送顏真卿使赴河隴（岑參）
 †逢入京使（同） 磧中作（同） 尋胡隱君（高啓） †秋思（張籍）
 †回鄉偶書（賀知章） †咸陽城東樓（許渾） †除夜宿石頭驛（戴叔倫）
 †無題（李商隱） †塞下曲（常建） †登科後（孟郊） †春日偶作（武元衡）
 †己亥歲（曹松）

※注5 10社12種の新課程用教科書（唐詩教材を採録するもの）について調査。

※注6 杜甫には「絶句」と題する詩が複数あるため、①②③として区別した。